

追悼

竹重貞蔵さんを偲ぶ

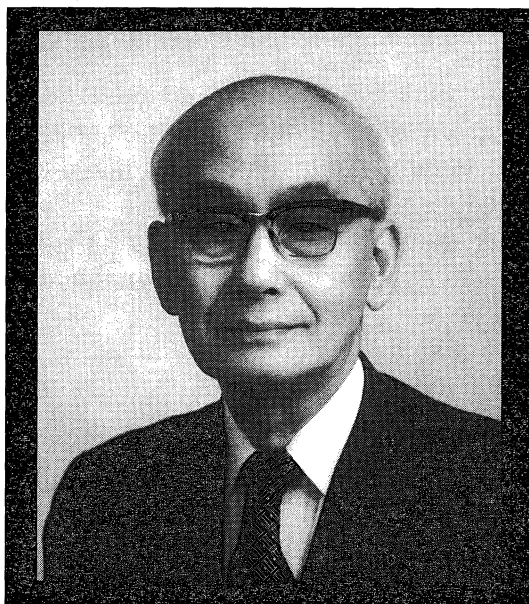
(株)日本都市計画学会名誉会員
都市づくりパブリックデザインセンター理事長
今野 博

今春、「足腰が弱ったので車椅子で近くの公園を散策したり、又源氏物語を読んでいるが中々難解だ云々」と92歳になられた竹重さんから、お元気そうな年賀状を頂戴したのであったが、この4月軽い脳梗塞で床につかれ、リハビリの甲斐なく8月5日永眠された。白髪で頭の切れる歯切れのいい方で、区画整理界の先達として種々ご指導を戴いたのであるが、ついに天寿を全うされた。謹んで哀悼の意を表する次第である。

故人は、日本住宅公団の宅地部長を退任されて後、13年間に4冊の区画整理叢書（第1巻・土地区画整理入門、第2巻・土地区画整理組合事業の手引、第3巻・換地設計の手引、第4巻・土地区画整理用語辞典）を出版され、全国的に活用されているが、その第4冊目の序文に、『著者は生来蒲柳の質で、17歳より胸を病み、青壯年期の30年間の過半を結核菌との闘いに病床に送ることが多く、当時の平均寿命であった50歳まではとても保つまいと、自他共に認めていたのであるが、元気で満80歳の誕生日を迎えることができた。これも健康一筋に努力と辛抱とを積み重ね、常に生き甲斐を求めたためであろうが、天地の恵み、社会の恩、友人知己の知遇の恩の賜であると深く感謝している。本書をもって、私の八十路の坂の入口に建てる記念碑として、感謝の念をこめて世に送る次第である。昭和60年3月29日』とある。

確かにご自分を律すること峻厳であった。充分なお仕事もなされて天寿を全うされて、ご自分でも満足であったのではないと思われる。

広島に原爆が投下された日、故人は広島県土木部の都市計画課長として在任しておられ、被爆者の一人であるが幸いに生命に別状なく、広島市を始め県下の戦災都市の復興事業の指導をされたのである。



故 竹重貞蔵 氏

本会の名誉会員竹重貞蔵氏には平成9年8月5日永眠されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

社団法人 日本都市計画学会

昭和22年愛知県土木部計画課長に赴任されてから、私は面識を得たのであるが、区画整理に関しては一家言をもっておられた。昭和30年日本住宅公団が創立されたのに伴い、初代の宅地部長として白羽の矢がたったのは当然であった。当時私は本省の区画整理課で公団施行の区画整理事業の企画立案の立場にあり、設立当初のこととて、故人とはなんべんとなく打合せをし、要求を承ったのである。

当時の新市街地開発の区画整理は坪当たり4～500円が普通で、北海道では100円というものもあった。故人は住宅公団の衛星都市開発は質のいいものにすべきだと、道路には出来るだけ下水管を入れ、舗装率を上げ、更につとめてカーブを入れる等、最初の私の企画した予算（坪当たり1000円）ではまかない切れず、数年後には増額したことであった。区画整理事業に理解の薄い公団の理事諸公を向こうに回して、賢明に説得された姿が脳裏から消えない。

又、都市計画学会として忘れることの出来ない

ことは、故人が学会の事務局長在任中に学会を社団法人にした功績である。認可担当省が建設省ではなく文部省であったがため、ご苦勞されたのである。1年間続いた折衝の末、旧制五高の同級生(故)西畑正倫氏の助力はあったが、昭和43年に社団法人の認可が実現したのである。

最後まで都市計画に愛情を注ぎ献身された故人に対し、深甚なる敬意と感謝の念を捧げ追悼の言葉とする。

竹重貞蔵先生の業績

(株)都市計画コンサルタント協会専務理事

吉 宗 一 哉

竹重貞蔵先生が平成9年8月5日急逝された。享年92歳である。このところ、お目にかかっておらず、入院されたとのお手紙を頂きお見舞いにと考えていた矢先、お亡くなりになり、誠に申し訳なく思っている。

竹重先生は、明治38年3月、福岡県甘木町(現甘木市)にお生まれになり、昭和6年3月九州帝国大学土木工学科を卒業され、福岡県、内務省、広島県、愛知県、日本住宅公団と歴任された。

私が存じあげたのは愛知県時代である。学生時代、都市計画を愛知県竹重計画課長、土木行政を同じく綾道路課長から教わった。かくして私は名実ともに先生とお呼びする立場になったのである。

卒業後、私は愛知県庁へ就職し、土木部計画課勤務となり、今度は直属の上司として竹重先生にお仕へすることとなった。とは言っても課長と測量助手(当時は雇の下の身である)では会話の機会は全くなかった。

当時の計画課は大世帯で課員は100人を越え、部屋も2つに分かれていた。また所掌業務も多く、通常の都市計画業務の他、一宮市、岡崎市の戦災復興事業、小幡緑地、大高緑地、牧野ヶ池緑地の公園緑地整備事業を行っていた。これ以外に中京競馬場、愛知カントリークラブの建設等変わった業務も行っていた。

このような計画課を統率される御苦勞は大変だったと思われ、以前の胸部疾患が再発し、入院され

たことを記憶している。この愛知県土木部計画課長を昭和22年4月から昭和30年9月迄の8年余りお勤めになったのである。

昭和30年7月25日、日本住宅公団が誕生した。

竹重先生は、土地区画整理に関する該博な智識、手腕を買われ、昭和30年9月日本住宅公団の初代宅地部長となられた。日本住宅公団(昭和56年10月1日、宅地開発公団と合併し住宅・都市整備公団に改組)は公団法第一条に、「宅地の大規模な供給と、健全な市街地に造成するため土地区画整理事業を行う」と定められており、この業務を行う責任者として竹重先生が選ばれたのである。

日本住宅公団は創立時は旧恩給局ついでノートンホールで業務を行い、宅地部は更にリーダーズダイジェスト日本支社別館と転々としたあげく現庁舎に落着いた。当時の宅地部は企画課(小西是夫課長)工事課(浅野英課長)の2課で出発した。このような中で、業務の執行に必要な規定、基準の制定が竹重先生を頂点に進められ、今日の住宅・都市整備公団の都市開発事業の基盤が作られたのである。なかでも土地の先買を行い、施行者公団と地主公団の利点を利用し事業の効率をはかられたのは有名である。すべてについて精緻なお考えに職員は感心したものである。

かくして金ヶ作(千葉県松戸市)猪高(名古屋市)香里(大阪府枚方市)等の大規模宅地開発事業が開始された。

日本住宅公団には昭和35年12月迄在職され、以来銀座パーキングセンター、日本都市計画学会、全国土地区画整理組合連合会、福岡土地区画整理協会に勤務され、生涯を土地区画整理に捧げられたといっても過言ではあるまい。

竹重先生は昭和20年8月6日、広島市への原子爆弾投下に遭遇されたが、お乗りになっていた自転車の故障で官舎を出るのが遅くなり、それが我が身を救ったとお聞きしており、色々な会合でこの長命は到底考えられなかったと口癖のように言っておられた。非常に幸運な方である。

この最後の幕のひかれ方はあのさばさばした御性格をあらわされたような気がしてならない。謹んで御冥福をお祈りする次第である。